

宇津保物語の寺院

丸 田 啓 子

序

一つの時代に一つの文学作品が存在する以上、その作品成立上の動機ともなり制約ともなつた時代環境をあとづけてゆくことは、作品の文芸性を理解する上に欠くべからざる作業と思われる。作品の存在は創作活動の結果であり、当然その背後には作者の造形の意識が存在する。思想的、芸術的、文学的、社会的諸環境はこの作家の目を通つて創作活動に参加し、一方においてこれを制約しながらも、作品独自の文芸性を形成するにいたる。

物語文学史の上において、現存の作品の中最初の長篇物語と考えられている宇津保物語は、二十の巻々より成り、量は源氏物語の約三分の二にもあたる尨大なもので、短篇物語を主とする古物語の世界に始めて可能にされた一つの持続的な創作精神を示すも

のである。この宇津保物語の文芸性を尋ねるための一角度として、その創作精神と関連をもつ時代環境の中から、ことに密接な関係にあると思われる仏教を取りあげ検討を試みた。その際、基礎的な一作業として全二十巻の中から物語に現われた寺院を抽出し、テーマを追う一つの手がかりとしたが、本稿はそれについての報告を意図したものである。

一

宇津保物語には「寺々」「山々」という不定称を加えて三十三の寺院関係の名称が見られる。これらは本文中一例以上六例にわたつて用いられているが、これらを列挙するにあたり、寺院名抽出箇所本文と、寺院の宗派、本尊に関する簡単な説明とをつけ加えたい。大体、同系のものは並ぶようにし、全体に通し番号を附

した。なお、引用の本文、巻、頁数は有朋堂文庫本による。

1 比叡

今日は比叡の座主只今の逸物をなむ……（嵯峨院二五四頁）

真砂君の七日のわざ……を比叡にてし給ふほどに（菊の宴五四）

七大寺より始めて……比叡・高雄に誦經（同五四二）

源宰相猶すべき方覚えねば比叡に上りて（同五四三）

比叡山。天台宗の根本道場。延暦七年（A. D. 788）薬師如来を本尊とする一乗止観院が建立され、勅により延暦寺と称し、平安城の鎮護に任ぜられる。

2 比叡の総持院

比叡の山に惣持院の十禅師なる大徳（藤原の君一二〇）

比叡山東塔の寺。法華仏頂総持院と称し慈覚大師の建立。仁寿元年（A. D. 851）。中世以後廢滅。

3 比叡の中堂

かたきを得むずる様は比叡の中堂に常燈奉り給ひ（藤原の君一二〇）

比叡の御堂に物忘れせさせ給へと（同一五一）

比叡に上りて……自らは中堂に七日七夜（菊の宴五四三）

最澄の草創（A. D. 788）。一乗止観院、根本中堂とも称す。はじめ薬師仏を本尊とする堂を中堂と称し、その左右に文殊堂と經

堂があつたが、仁和元年（A. D. 887）三字を合同し、これを中堂、或は御堂と称した。

4 比叡の四十九院

一寺に一合奉りたまふとも比叡の四十九院に一月一石四斗七升なり（藤原の君一二一）

比叡に上りてあるが中に験かしこき四十九所によき阿闍梨四十九人を選びて、阿闍梨一人に伴僧六人具して、四十九壇に聖天供を、布施供養ゆたかに、うるはしき衣を袈裟に著せつゝ行はせ、自らは中堂に七日七夜、かせの忌をして、五体を投げて、此の事成し給へと行ひ給ふ（菊の宴五四三）

四十九院という名称は奈良朝行基が畿内に四十九院を建立したのが始めて、後世伽藍の院内の称となる。数は兜卒内院を模倣したもの、ただし四十九という数は薬師經によるものと推定される。^{（註1）}

5 真言院

かの行人を……真言院の阿闍梨になされぬ（吹上下四五六）

真言院の律師山籠りにしかば（蔵開中一四六）

真言院の律師は家など買ひて（蔵開下二四〇）

真言院の律師のもとに、消息言ひ遺はしつ（国讓中三九五）

真言院の律師して孔雀經の御修法行はせなどして（国讓下五六四）

真言院の律師一人いち早く読む（〃五七一）

修法院又は曼荼羅道場。大内裡の八省院の北、中和院の西にある。仁明天皇の承知元年（A. D. 834）空海の奏により設けたもの。

6 嵯峨院

大將とのには（前田家本）

かくて、後の宮の賀、正月二十七日出で来る乙子になむ仕うまゐんに御かまいらんと（前）
つり給ひける（嵯峨院二七二）

かの行人を院の帝限なく労はらせ給ひて院の内に壇所賜ひなどしてさふらはせ給ふ（吹上下四五六）

嵯峨院の蔵人御使にて 御車のもとによりて（楼の上上六四二）
かくて源中納言、嵯峨院にまゐり給ひて（〃 下七三一）

嵯峨院の太後の宮（〃 七三三）

（院に籠られた嵯峨帝の尊称としては集中他にも多し。）

大覚寺。古義真言宗本山。もと嵯峨天皇の離宮であつたものを、

貞観十八年（A. D. 876）改めて寺とし、淳和天皇の皇子恒寂親王を開基とする。

7 高雄

比叡・高雄に修経す（菊の宴五四二）

高雄山神護寺。はじめは高雄寺と称した。草創時は不明だが天長元年（A. D. 824）河内国の神護寺を高雄寺のあとに移し、空海が住持となつた。真言宗東寺派の別格本山。

8 奈良

又奈良・泊瀬の大悲者（藤原の君一二〇）

物語中一例。下に続く泊瀬寺は行政権の異なる大和国にある。従つて奈良は泊瀬を修飾するものでなく、奈良の大悲者、泊瀬の大悲者という意味と思われる。大悲者は観音のこと。天平年中の草創である法華寺の本尊は平安初期の木像十一面観音。三月堂の本尊はやはり同期の不空羅索観音。共に平安朝に大いに信仰された六道の観音である。これらの一つを指すものであろうか。

9 泊瀬

又奈良・泊瀬の大悲者、人の願ひ満て給ふ（藤原の君一二〇）

右大將のぬし 長谷より御嶽詣と思はし立ちて出で給ふに……
大將のぬしいたく歎きて長谷に詣で給ひて思す事をかたう大いなる願を立て給ひて（菊の宴五二八）

初瀬・壺坂・よろづの所々にまうで（国譲下五六五）

長谷寺。大和。本尊は十一面観音。養老五年（A. D. 721）道明上人の建立。一説天平年間道明の弟子徳道の草創。東大寺の配下にあつて栄える。

10 壺坂

竜門・坂本・壺坂・東大寺……すべて仏と申すもの（藤原の君一二〇）

……壺坂・御嶽にしのびて詣で給ふ（菊の宴五二八）

初瀬・壺坂・よろづの所々にまうで（国護下五六五）

壺坂寺。壺坂山南法華寺。大和高市郡。本尊は千手観音。大宝三年（A. D. 703）弁基大徳——一説道基上人——の開創。法相宗。観音の霊場として栄える。

11 粉河

府の源少将、粉河にまうで給へる御供になむ（吹上上三三二）
粉河に願はたさむと思う給へて紀伊国の方にまかりたりしを（吹上上三六二）

粉河の道のはとりになむ（〳）

粉河寺。紀伊国那珂郡粉河町。本尊千手観音。宝亀元年（A. D. 770）大伴孔子古の草創。

12 石山

みだり脚病いたはり侍るとて石山などにまうで侍るとなむ（樓の上下七三一）

石山寺。本尊如意輪観音。天宝勝宝中（A. D. 749～756）良弁の開創。

13 竜門

竜門・坂本・壺坂・東大寺（藤原の君一二〇）
竜門・比叡・高間・壺坂・御嶽にしのびて詣で給ふ（菊の宴五

二八）

竜門寺。吉野竜門村。義洸開創（寂A. D. 728）。修験者日蔵（寂A. D. 985）がこもつた処。現在寺址のみ。詳しいことはわからないが義洸、日蔵が共に法相の僧、故に法相宗かと思われる。修験道の寺。

14 熊野

今は熊野にと思ひて出づるに（梅の花笠二九〇）
唯今も熊野にまかりまうづるなり（〳 二九五）

涼五歳にて熊野にまうで逢ひて山伏の申し侍りし（吹上下四四）
御嶽、熊野詣、やんどとなき上達部おりたちて山踏し給へる年にこそあれ（あて宮五五三）

熊野権現。紀伊国東牟婁郡。本宮・新宮・那智の三宮があり、熊野三山とも称する。三宮は崇神天皇（B. C. 82）と仁徳天皇（A. D. 398）の間の建造。はじめは伊弉諾・伊弉冊命を祭つたものだが、中古仏教徒がこの三山を掌るに至り、本地垂迹説を唱え、本宮は阿弥陀、新宮は観音、那智は勢至を本地とするという。修験道の山として有名。

15 金の御嶽

或は山林に交りて、金の御嶽、越の白山……まで参り給ひつつ（菊の宴五〇四）

右大将のぬし長谷より御嶽詣と思はし立ちて出で給ふに（菊の宴五二八）

御嶽、熊野詣、やんごとなき上達部（あて宮五五三）

金峰山。大和吉野より大峰に至る群山の称。特に吉野山の高峯である大峰を中心とする一帯の地域をいう。役小角（A. D. 634 ~ 700?）の開くところと伝える。山中には醍醐天皇（A. D. 859 ~ 876）の御宇に再興された天台宗の金峯山寺があり、修験道の本山。

16 越の白山

或は山林に交りて、金の御嶽、越の白山、宇佐の宮まで参り給ひつつ（菊の宴五の四）

近き社には詣でぬ所なく、越の白山まで参るに（〃五三二）
白山。加賀国の南方にあつて、越前・飛騨・美濃にまたがり富士山・立山と共に日本三山の一である。古より修験道の行場として有名。養老元年（A. D. 717）泰澄法師の開闢と伝える。のちに比叡山に属す。絶頂の御前嶽には十一面観音を本地とする妙理大菩薩がまつられ、その北方は阿弥陀、南の別山は聖観音を本地とする。

17 比曾

竜門・比曾・高間・壺坂・御嶽にしのびて詣で給ふ（菊の宴五

二八）

比曾寺、吉野寺。草創は用明天皇二年（A. D. 587）聖徳太子と伝えられる。本尊は日本書紀欽明天皇十四年五月の条によれば、ただ放光樟像とある。家永三郎氏は、日本書紀の記事を原型として発展したと考えられる日本霊異記上の五の説話によつて、比曾寺の本尊は阿弥陀像であるとされ、井上光貞氏は、これに對し靈異記の記事が敏達帝の年のことであり、年代的に同時代でない点に弱点があることを指摘される。^{（註3）}修験道的性格をもち、一時衰えたが後（A. D. 1279）金峯山寺の僧により再興された。

18 高間

竜門・比曾・高間……（菊の宴五二八）

高天寺。大和国葛城高間。葛城山の高峯で俗に高天原という。役小角が山中に修行してより道士絶えず、修験道の霊場となつてゐる。

19 志賀

源宰相、志賀に行しにまうで給へりけり（嵯峨院二一四）
頭中将も志賀に籠りて同じ様なることをして帰り出づるに（菊の宴五四四）

例の宰相、志賀に詣で給ひて、それより斯くなん（藤原の君一三七）

志賀山寺・崇福寺。現在の近江大津市の北にあつた寺院で、本尊は弥勒菩薩。天智天皇の御願により、七年（A. D. 668）の創立。頭中将がこの本文につづく歌で

入りぬべき路や／＼と足曳のりうげの山を立ちならしつるとよんでいる。竜華は竜華樹。弥勒は五十七億七千万年の後、下生して竜華樹の下で説法し衆生を済度するといひ、志賀山寺への峠、山城国と近江国との境の峠をりうげ越えとよぶ。この歌は異同があるが、りうげとすれば意味はよく通る。

20 石作寺

かくて石作寺の薬師仏現じ給ふとて、多くの人まうで給ふ（楼の上上五九五）

物忌し侍らむとて、石作寺にこもりて侍りつるに（〃 六二）
丹後国石造寺。本尊薬師仏。靈驗の仏とされる。続古事談に長谷観音が牧童に化してこれを作つたと伝えている。^{（註4）}太秦広隆寺の本尊薬師如来の像は、陽成帝の時別当道昌がこの石造寺の薬師仏を移したものだと言う。

21 鞍馬

鞍馬より若くより籠れる行ひ人の髪ところ／＼白けたるが……
大殿の御門に来て（忠こそ一九二）
年若かりしより鞍馬の山にこもりて今年三十年になり侍りぬる

山伏なり（忠こそ一九三）

かの忠こそその行ひ人かの暗部山に大なる寺をつくりて、父母の御為にいかめしき経仏供養し（梅の花笠二八九）
暗部をばさる修業したる所にて（梅の花笠二九〇）

いにしへに今日をくらぶの山風は花の衣を吹きかへすかな（〃 二九六）

鞍馬山鞍馬寺。宝龜元年（A. D. 770）鑑真の弟子鑑禎の草創。本尊毘沙門天。皇居北方の守護にあたる。密教においては福を施すとされ広く信仰された。延暦年間に勅願寺となり天永年間（A. D. 一一二〇）に天台宗に改めらる。

22 東大寺

……東大寺斯くのごとく総べて仏と（藤原の君一二〇）
僧綱たちも比叡の奈良の東大寺やむごとなき限り（嵯峨院三五）
華嚴宗総本山。総国分寺。八宗兼学の道場。本尊盧舍那仏。天平年中本願は聖武天皇、開基は良弁、勧進は行基により建立される。

23 国分寺

国分寺の童べのあきたる事のさふらふなと申しき（楼の上下七二五）

四天王護国寺。初めは三論・法相・華嚴の僧を住職としたが、後天台真言を加える。聖武天皇の勅願によつて天平十三年（A.

D. 741) 諸国に分置。

24 七佛寺

七佛寺より始めて……修経す(菊の宴五四二)

東大寺(華嚴)、西大寺(真言律)、興福寺(法相)、元興寺(法相)、大安寺(真言)、薬師寺(法相)、法隆寺(法相)。

25 坂本

竜門・坂本・壺坂・東大寺斯くのごとく総べて仏と申すもの

(藤原の君一二〇)

地名。「藤原の君」巻の坂本は、竜門・壺坂・東大寺と同様に仏の所在を示していると思われるが、坂本寺という寺名は見出せず、宗派本尊等は不明。「忠こそ」巻「あて宮」巻に所見する坂本とは異なる。

26 とうりう寺

此の東山なる寺の塔の会し給ふべしという聞えをなして(藤原の君一二二)

此のとうりう寺の塔の会に優るものはなかるべしと(〃一

二三)

とうりう寺に上野の御子の大いなるわざし給ふ(藤原の君二三)

此処はたうりう寺(画詞)(〃一二五)

道隆寺か。この文から東山にあることがわかるが、東山にこの

実名の寺なし。

27 水尾

少将を恋ひて花摘みがてら水尾におはしたり(あて宮五七二)

水尾の行人のかやうの折をかしかりしはや(蔵開下一八八)

さるは去歳より「水尾の山籠とふらひにまからむ」と言ひ契り

て侍るを(国護下四九六)

水尾へまかるなり御消息やある(〃四九八)

出づとせし身だに離れぬ火の宅を君水の尾にいかですむらむ

(〃五〇五)

水尾、京都市右京区嵯峨水尾。詳細は不明だが、仲頼少将のこもつた水尾の住いを称して「国護下」巻に

その寺にも、めぐりの寺々にも御読経せさせ(〃五〇八)

とあることによつて寺である事がわかる。又そのめぐりに山伏が多い事が記されている。

その山のめぐりの山にたにあり(〃五〇四)

異同のある箇所であるから一まずおいても、別に

山伏どもめし集めて飯酒くはせ、乾飯糰一つづつ取らす(〃

五〇七)

とある。地域的には清和天皇が真言に帰依し、出家された場所であり、崩御(A.D. 880)後の御陵もこの水尾山にある。従つて

真言で修験者の特色をもつ地域と思われる。

28 西山

朱雀院の御子たち、后腹の二の御子は御病して法師になり給ひて西山におはす（国譲下五八二）

洛西、源氏若菜上に朱雀院の帝が

西山なる御寺造りはてて、うつろはせ給はむ程の御いそぎをさせ給ふに添へて^{（註5）}

とある。朱雀院という西山と関連して考えられたものであろう。西山には台密六流の一である西山流がおこっているが、地域の広さから関係あるとも断定し得ない。

29 六十余国の仏神

六十余国をめぐりて仏神に読経奉りて（梅の花笠二九〇）

今一度見せ給へと六十余国を行ひありきけるを（吹上下四四〇）

後世の六部は室町時代に始つたものであるから年代的に合わない。六部とは書写した法華經一部づつを全国六十六ヶ所靈場に納めつつ廻国する行脚僧のこと。この場合は「仏神に読経」であるから神仏習合の体である。

六十余国という国の数については続日本紀が一つの解明を与えてくれる。即ち続日本紀十九、孝謙天皇の条

天平勝宝八歳十二月巳酉、勅遣^二皇太子及右大弁從四位下巨

勢朝臣堺麻呂於東大寺^一、（中略）講^二梵網經^一、講師六十二人……仍写^二六十二部^一、将^レ説^二六十二国^一。

である。我国は文武天皇大宝の制に、国を大・上・中・下の四等に分つとあり、孝謙天皇の時は右にあげた様に既に六十二国あつた。古事類苑地部一「地総載」によつて我国の国数を更に辿ると、嵯峨天皇を経て清和天皇の天長年間に至つて六十八国となつたとある。この数のまま明治に至る。即ち宇津保物語語成立時には既に我国は六十あまりいくつかの国々に分けられていた訳であり、続日本紀の例によればその国数に合わせて写経説経も行われていたわけである。忠こそそのあげた六十余国という国数は、この数をあらわすものと思われる。

30 宇佐の宮

……宇佐の宮まで参り給ひつゝ願し申し給はぬ人なきなにも（菊の宴五〇四）

藏人の少将宇佐の使にさゝれて下るにそれよりいはし水宇佐までゆるす逢ふことをなほいらへずば神を恨みむ（〃五三三）
続紀によれば天平勝宝年中に大仏鑄造の成就を告げて京に移つた宮。神仏習合して石清水八幡宮護国寺がたてられた。この寺の略記によれば貞観三年（A.D. 861）の頃に創められたもの。

31 比叡の御社

真砂君の七日のわざを母君仏經書き、法服調じて比叡にてし給ふほどに、宰相思ひ成し給へと御社に詣うであひ給へるに此の君のわざをする願書に……一山の人悲しみのゝしる(菊の宴五一四)

鎮守山王権現、比叡山における鎮守神の総称。一実神道の本尊。一実神道は神道一派。伝教大師が山王の神授により、法華一笑の理に基いて神仏同体の義を立て、我が国の一切の諸神を解釈した教説。法華の思想により神祇を解釈しようとする神道一派。

32 山々寺々

藤原の君(一二〇)、忠こそ(一七〇)、菊の宴(五〇四・五三五)、国讓上(三三九)、国讓中(四二九)

山々寺々と不定称で出てくるが、藤原の君の場合は行い人と、あとは修法と結びついている。

33 山々

忠こそ(一七三・一七四)

山々もやはり修法の場として登場。

物語に登場する寺院関係の名称は以上である。

二

これら三十三の寺院を信仰の系統により分類すると次のように

なる。(カッコ内の数字は前述の寺院の番号を表わす。)

一、比叡山関係(1234)

二、朝廷と関係を持つ真言宗関係(567)

三、観音信仰の寺院(89101112)

四、修驗道関係の寺院(131415161718)

五、弥勒信仰(19)

六、薬師信仰(320)

七、毘沙門天信仰(21)

八、神仏習合関係(293031)

九、各宗兼学の国分寺の類(222324)

十、その他、不明(252627283233)

これによると特に修驗道関係と観音信仰の寺院の数が目立ち、総じて現世利益の信仰に関連している寺院がクローズアップされるが、それは作者の本文中における寺院の取扱いとも一致する傾向である。

物語中の三十三の寺院は、前述のように各々本文中一例以上六例にわたって用いられ、この中追善・供養の二用例(1・21)隠遁の場としての二寺院(27・28)、情況説明の一寺院(23)を除くと他は全部宗派には関りなく、現世利益を願う修法・加持祈禱等の対象として登場する。即ち寺院は現世利益の対象として宗派

に関りなく殆ど同時限に描かれるわけであるが、この事實は、平安朝において天台・真言・法相の三大仏教を始めとし、すべての仏教の宗派が現世利益を根本として密教化の傾向を辿つた時代性と一致する。

専門諸家の指摘されているように平安朝においては密教全盛といつてもその教義教理の理解はなおざりにされ、人心は専ら呪術的な加持祈禱に関わり、しかもそれでさえ法の専門家である僧侶や阿闍梨を仲介としていた。その間の事情は我国最初の僧史とされる虎関師練の元亨釈書によつても明らかである。十項目に分けて採録されたこの僧伝には、教義の解釈とか法話の内容或はそれに感じた聴衆の感動内容は記されずに、もつぱら僧のさわやかな声、その験あらたかな聖僧ぶり、修法の効験の奇怪さのみが記される。一例をあげれば

釈光意。姓河内氏。内洲石川郡人、容姿閑雅音韻清亮。毎臨講席道俗傾聴。大同年中為最勝会座主。有拳問辨如流。

暮年齋食不緩。弘仁五年三月。終于本郷、寿七十八。

又枕冊子にも同じ趣がうかがえる。

説経の講師はかほよき。講師のかほをつとまもらへたるこそその説くことのたふときもおぼゆれ。

即ち密教全盛といつても人心にかなつてもてはやされたのはその

雰囲気的呪術的な面であつた。宇津保物語の寺院の中修験道関係の寺院が最も多いのも、効験大であるとされる修験者等の修法による事が多かつた時代の信仰と同一の方向を示すものである。

物語には観音信仰の寺院も多い。観世音菩薩は法華経普門品に説かれ、平安朝に入り法華経が汎まるにつれて盛に信仰されたものである。普門品によれば、その功德は七難を除き、三毒をはなれ、二求兩願を満足させるとされ、典型的な現世利益の信仰で、密教では菩薩は胎藏界曼荼羅の観音院中に存在する。宇津保物語「忠こそ」巻に

月は一度故君の御為に八講し給ふ（一七四）

とあるが、この八講は法華八講であり、これによれば物語成立時にはすでに法華経は講読されていた。又「俊蔭」巻の冒頭には普門品にあやかつた観音靈驗譚がみられて、作者の観世音菩薩に関する知識はすでに備わつている。観世音菩薩を本尊とする寺院が多く見られるのも当然といえよう。

物語中には、薬師信仰・毘沙門天信仰の寺院も見られるが、毘沙門天は王城鎮護、薬師仏は叡山においては延命息災法の本尊であり、共に現世利益の信仰を表わすもので、この他弥勒信仰も見られるが作者の扱い方は自覺的なものでなく、修法祈禱の対象としてこれを扱っているのも時代性の一つの反映とみられる。

本文中の寺院によつて以上の様な結果が得られるが、参考までに宇津保物語に現れた經典をながめてみたい。

物語中には次の經典の名を見出す。

大般若

阿修羅の為に大般若を書きて供養せよ（後蔭八）

年の終の御読経せさせたまふ大般若経三日（嵯峨院二五四）

この春日にも詣でて夜一夜大般若をおほぞうに読みつゝ奉りて

（梅の花笠二九〇）

尊勝陀羅尼

この仙人……尊勝阿羅尼を無等三昧に行ひ誦して……輪廻生死の罪を滅ぼして人の身を得たるなり、尊勝陀羅尼を念じ奉る人を供養したる故なり（後蔭一七・一八）

千手陀羅尼

大殿の御門に来て千手陀羅尼を尊く読む（忠こそ一九三）

孔雀経

帝……行人に孔雀経理趣経よませ給ひて（吹上上四四一）

理趣経

同前（〃 四四一）

陀羅尼経・陀羅尼

（嵯峨院太后六十賀）陀羅尼などせらるなり（菊の宴四八〇）

律師は……さらにはやき陀羅尼読ます（国譲中四〇〇）

この御陀羅尼をのみなむ音に承れど（〃）

律師陀羅尼よみ給ふ（国譲下五〇五）

山籠たゞごとにて陀羅尼をよみ給ふ（〃）

忠まろは法師に陀羅尼読ませて（〃 五八七）

心静にてわれも陀羅尼念じ奉ることせむ（楼の上下六九九）

産経

中納言かの蔵なる産経などいふ書ども（蔵開上一〇）

提婆品・菜つみ水汲み

読み講ぜさせ給ひし提婆品（楼の上下六九九）

彼の仙人に菜つみ水汲みせし功德の故に（後蔭一八）

最勝王経

最勝王経此処にして日々にかの御為に読まむ（楼の上下六九九）

阿弥陀（三昧）・百味の飲食

遊び人等阿弥陀三昧を七日七夜（後蔭一七）

百味を供へたる飲食になりぬ（後蔭五一）

一切経

まづ故君の御為に一切経多宝の塔つくらせ給ひて（忠こそ二〇七）

いかめしき経・経

父母の御為にいかめしき経仏供養し（梅の花笠二八九）

真砂君の七日のわざを母君仏、経書き法服調じて比叡にてし給ふほどに（菊の宴五一四）

以上十二例である。鎮護国家は仏教の呪術的な面であるから、最勝王経はこれに含める。又一切経は総合名、「いかめしき経・経」は具体的な名称ではないから省くと、結局十例の中七例までは現世利益の經典であり、この数字は寺院より得た結果を裏づけるものとなつてゐる。

以上のように物語における信仰の主潮は、修法・加持祈禱であつた。しかしその根本となる知識は、不徹底であつた。それは祈願の対象となる仏の各々の誓願による区別が作者の意識に無いことから指摘し得る。即ち「藤原の君」巻に

百万の神、七万三千の仏に御みあかし幣帛奉り給はゞ仏神各々
与力し給はむ（一二〇）

とあるように、作者においては仏と神は祈願の対象として同等にしか意識されていないのである。

又物語中に現われた仏名を通してこれと同様の結果がえられる。即ち寺院が三十余例あつたのに対し、明瞭に仏名が示されるものは僅か五例（観音・薬師・吉祥天女・文殊・阿弥陀）で、しかも本文中の頻出度は薬師仏の三度を除けばすべて一・二度にとどまる。これに対し単なる「仏」という言葉は、死者をさす場合

を除いて二十九回、「仏菩薩」一回、「神仏」十四回、「仏神」六回、「神」は雷をさす場合と「神さびたる」を除いて二十一回使用される。即ち加持祈禱は盛に行つてもそれは固有の仏に関連させた嚴密な知識ではなしに、単に「仏」であり「神」であればよかつた程度の意識であつて、これは前述の元亨釈書の有様とも合致するものである。

物語中の阿弥陀仏について一言したい。阿弥陀仏は「俊後蔭」巻に登場し、ここにおいて作者はこの仏の脇士を観音勢至にはせず文殊にしたという知識の不徹底さを露呈するが、これについては時代的に浄土教が未発達であつた事が制約を及ぼしていると思われる。浄土教は行われていたとしても「忠こそ」巻にある様に、

この世にあらば息災となれ、亡きものならば……彼の世の途ともなれ（二〇七）

というこの世も幸福でありたい、あの世も幸福でありたいという二世安樂的な信心（註8）であつて、中世に於ける浄土教とは異り、現世利益の一面を抜き得ないものであつたと考えられる。

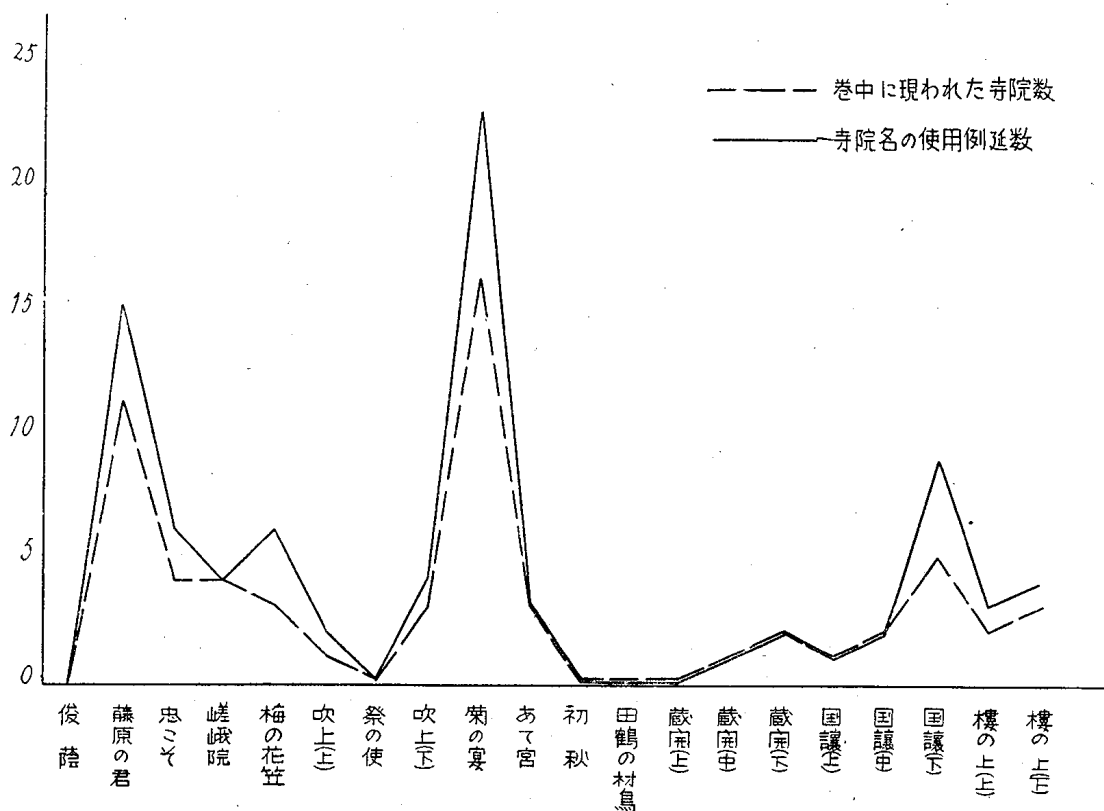
物語に現われた信仰は不徹底さの面においても平安朝中期に至る現世利益の信仰と歩を等しくするものであるが、ここで因果思想について一言したい。輪廻の思想は法華経に説かれる。宇津保物語においては法華経の提婆品と提婆品に基いた文が「俊蔭」巻

と最終「楼の上」巻に照応して現われるが、本文の内容によると作者は法華経の内容を相当確かに理解していたと考えられる。仏教の呪術的な面が全盛を極めていたとはいえ、天台教学は貴顕の教養として確かな根を下しており、前述のように「忠こそ」巻にも「月に一度」八講会が開かれる様を窺いうるほど法華信仰は盛だつたのであるから、作者がその程度の認識を有していたのも当然である。主要なことはこの長篇物語の創作衝動の動機をなすと考えられる「俊蔭」巻の仏の予言——予言が成就するという結末を導きうる、「俊蔭」巻以後に物語発展の可能性を与える前提——が、この法華経提婆品の輪廻思想に基いた発想だという事であり、それが「俊蔭」巻と「楼の上」の本文の対照から論証される事である。紙数の関係から詳細は省くが物語に長篇性、持続性を与えるものとして、この点に影響を及ぼした天台教学の力は大なるものがある。

三

宇津保物語の仏教信仰について以上の様な示唆を与える寺院の物語中に於ける分布はどうであろうか(グラフ参照)。

寺院は此の物語において「藤原の君」巻と「菊の宴」巻に集中的に現われた。この両巻は主構想の一つである貴宮求婚譚の尤たる



巻で、東宮以外のすべての求婚者が失敗するべく予定され、これら得恋を願う者達が方々の寺院に願をかける為寺院名が頻出した訳であるが、作者の創作意図においては、人間界にひき下されてはいるが、あて宮入内というロマンスの叙事的要素が大きなパーセンテージを占めている為、所詮これらの願は無駄であつた。即ち作者の創作精神においての信心に対する物語の勝利であり、その意味においてこれらの寺院はこの構想を細部的に浮き上らせる役目を果たしたと言える。これらの寺院は「国譲下」巻の場合は仲忠の音楽靈験譚に寄与し、「忠こそ」巻の場合^(註9 10)は上坂信男氏の指摘されるように忠こそ物語を生み出す源泉となつた素材を示唆しながら、前述のあて宮求婚譚に参与し、長篇宇津保物語を成立せしめた作者の創作精神について、多くの手がかりを与えている。

四

短篇物語を主とする古物語の世界に始めて可能にされた長篇物語、その可能性が具体的には生活の知的側面としての仏教から生じた。無意識的にもせよ作者が仏教を構想にとり入れたといふ事実は、それ自体作家の客観性或は知性の芽生えを意味している。天台教学は人々に知的生活を与え、密教はこれに雰囲気添えたわけであるが、これらの知的世界にはぐくまれた客観性、理性は

物語発生期において一つの創作精神の成立を可能ならしめたと共に、源氏物語より以前の成立だと考えられているこの宇津保物語の文芸性を築く一礎石ともなり得た事を以上の作業より結論する。

いうまでもなく「文芸性」はあらゆる方面から検討されて初めて定説を得る。冒頭にも述べたように本稿はあくまでも「宇津保物語の文芸性」を尋ねるための一角度としての寺院の抽出であり、その報告を意図したものであることをここに附記したい。

註1 薬師琉璃光如来本願功德経によれば次の如くである。

……若有二病人一欲脱二病苦。当下為其一人。七日七夜受中持八分齐戒。応下以二飲食及余資具。随二力所并供中養心芻僧。昼夜六時礼二拜供三養彼世尊薬師琉璃光如来。説二誦此経二四十九遍。然二四十九燈。造二彼如来形像七軀。一一像前各置二七燈。一一燈量大如二車輪。乃至四十九日光明不絶。造二五色綵幡二長四十九搩手。応下放二雜類衆生二至二四十九日上。可レ得レ過二度危厄之難。

- 2 「上代仏教思想史研究」——第一部聖徳太子の研究 家永三郎
- 3 「浄土教成立史の研究」——律令時代における浄土教

井上光貞

- 4 「続古事談」第四神社、仏寺の項参照。
- 5 朝日古典全書「源氏物語」四卷一六頁
- 6 「元亨釈書」卷二、慧解二之一
- 7 朝日古典全書「枕冊子」一〇七頁
- 8 註3の第二章第一節藤原時代の浄土教参照
- 9 「宇津保物語」における構想の発展」国文学研究
昭三二・九 上坂信男
- 10 「宇津保物語の源泉の一つ」平安朝文学研究第二号
上坂信男

(昭和三三 日文卒 日本文学研究室助手)